

『源氏物語』続篇の光源氏——〈死者〉として存在する光源氏——

佐藤 清 隆*

序、死を空虚化した「雲隠」巻の功罪

光源氏の物語は「幻」巻をもって終焉をむかえた。それは権力と情愛の混淆そのものさえ志向した〈大きな物語〉の終焉をも意味する。以降の物語では、もはや試練を通じて成長するビルドダウン・グス・ロマンのな主体は存在しない。「幻」巻に続く空白＝沈黙の「雲隠」巻は、輝かしい光源氏世界を生きてきた登場人物の、語り手の、読者の虚無感を余すことなく表している。しかし光源氏の死を描かなかったこと——一切の言葉の痕跡を拒否し、秘密のままに保持したこと——は、ちゃんと終わっていない感じを我々に与える。いわばそれは、〈喪失〉の喪失である。「雲隠」巻の空白には、死を内面化できなかった者の空虚ささえも表現されている。そして宇治十帖に先行する匂宮三帖は、そのようなぼっかり空いた気分を埋める役割を担っている。

* 国際文化研究コース 博士前期課程 二〇〇六年三月修了
現在、国際文化研究コース 博士後期課程在籍

1、「匂宮」巻の語り手の意識

「匂宮」巻から読み始めたい。光源氏の存在しない源氏物語第三部は、〈喪失〉のあとの物語である。

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にあり難かりけり。

〔「匂宮」五—十一頁〕(1)

第三部の発端、「匂宮」巻の冒頭は、光源氏という「光」の不在を語る一文から始発する。正篇の主人公・光源氏の死の言挙げと、新たな物語の萌芽を予告する冒頭文が、「光」というメタフォリックな表現で彩られていることに注意すべきだろう。《光源氏の生涯の総括が、他ならぬ「光」という修辞によって措定されている》(2)や、《美質を全円的にそなえた人物として、光源氏の存在の偉大さを改めて反芻させる態である》(3)などといわれるように、逝去した光源氏を「光」の一語でもって中心化するこの地の文は、我々の解釈をある一定方向へ捻じ曲げる機制として働く。すなわち、《光源氏は偉大である》という認識への誘導的所作である。これに続く形で「匂宮」巻は、亡き光源氏への鑽仰の辞を繰り返し述べ重ねていく。

天の下の人、院を恋ひきこえぬなく、とにかくにつけても、世はただ火を消ちたるやうに、何ごともはえなき嘆きをせぬをりなかりけり。(中略) よろづの事につけて、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし。春の花

の盛りは、げに長からぬにしも、おぼえまざるものとなん。

〔句宮〕五—十五頁

右では語り手の過剰で綺語めいた口ぶりに注目しておこう。「天の下の人」が光源氏を「恋ひ」慕い、累々と光源氏が追懐され続けていることを語り手は強調してやまない。また語り手は「…となん」と結び、聞き手に光源氏（と紫上）への追想の情をやわらかくもちかけてもいる。聞き手の共感を誘おうとする「句宮」巻の語り手の意識がかいまみえる。

次に示す文言は、幼年期から青年期にわたる内容を中心にして光源氏の生涯を語り手が回顧し、抽象化して語る箇所である。

昔、光る君と聞こえしは、さるまたなき御おぼえながら、そねみたまふ人うちそひ、母方の御後見なくなどありしに、御心ざまもの深く、世の中を思しなだらめしほどに、並びなき御光をまばゆからずもてしづめたまひ、つひにさるいみじき世の乱れも出で来ぬべかりし事をも事なく過ぐしたまひて、後の世の御勤めもおくらかしたまはず、よろづさりげなくて、久しくのどけき御心おきてにこそありしか。

〔句宮〕五—十九—二〇頁

「桐壺」巻から「明石」巻までの話題は表面的な見方にとどまり、「よろづさりげなくて、久しくのどけき御心おきてにこそありしか」と、その全体的な氣質を無条件に賞賛している。また、物語では描かれなかった事柄だ

が「後の世の御勤め」の時期も機に乗じ、理想的なものだったと誉めそやし語られる。この文言で語り手は、「ありしに」・「ありしか」と体験過去「き」を用い、光源氏の生涯がまさしく理想的だったことを事実めかして語っているのである。これに続くかたちで語り手は「昔の源氏は、すべて、かく立ててその事とやう変りしみたまへる方ぞなかりかし。」(「匂宮」五―二二頁)と述べ、光源氏が欠点のない人物だったことを執拗に念押しする。あたかも聞き手の賛同を求めるかのようである。

以上の記述を総合すれば分かるように、「匂宮」巻の語り手は、光源氏を理想化し、偉大な人物に仕立てあげようと躍起になっているのである。その方法はじつに単純で、光源氏を「光」(あるいは「火」という一語で表現し、その生涯を「よろづ」・「すべて」の語で捨象し理想性を執拗に強調するというものである。いわんやここにおいて死後の光源氏は、「天の下の人」に賛美され続けるような偶像と化している。

おそらく第三部全篇を通して断片的に表れる、亡き光源氏〈像〉の根底には、この「匂宮」巻の語り手の志向性を通して語られた、イデアルな光源氏観が潜在しているはずである。むしろ、物語の導入部ばかりに光源氏美化の言辞がつけぎまに表出されることも、このイデアルな〈光源氏〉を物語に潜在させるためであろう。

2、語り手の欲望―溶暗と溶明そして垣間見―

例証したように、「匂宮」巻の語り手は、亡き光源氏をイデアルな偶像に仕立てあげようとしている。その一方で、語り手は今後の物語を担う青年貴族の存在にもことさら意識的である。薫と匂宮の紹介がそれである。

さきに挙げた「匂宮」巻の記述は、隠喩的な方法で薫と匂宮を光源氏に結び合わせる役割をも担っている。冒頭では「かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にあり難かりけり」と、否定的な見解を述べていながらも、新たに「たちつぎたまふべき人」の擁立を暗黙のうちに予感させる。いわば〈見せ消ち〉的な文言である。それに続き「この君は、まだしきに世のおぼえいと過ぎて…」と薫を、また、「かかるほどに、すこしなよびやはらぎて、すいたる方にひかれたまへり」と匂宮を、光源氏と比較するかたちで物語に引き入れてくる。光源氏のフェイド・アウトと、薫と匂宮のフェイド・インが一文脈で並行的に行なわれており、主人公（格）の移行の瞬間は語り手の口吻のなかにあるといえる。

あるいは、ここに〈光源氏〉という磁場の力を見てとることもできるだろう。あたかも光源氏は、「匂宮」巻において吸収／放射という双方向にはたらく力の源として作用しているかのようなのである。〈光源氏像〉は、物事の起こるはじめ＝起源であるといえるかもしれない。

そういえば「匂宮」巻で、薫と匂宮がともに光源氏ゆかりの六条院で成長したことが述べられていた。

当代の三の宮、その同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二ところなんとりどりにきよらなる御名とりたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。

（「匂宮」五—十一頁）

あくまでも薫と匂宮の起源に六条院世界があるということを、語り手は意識させる。ここでも「いとまばゆき

際にはおはせざるべし」という、確実な推測にのせた語り手の評言に注意するべきだろう。光源氏に比べて見劣りすると象られる匂宮と薫ではあるが、光源氏世界の聖域たる六条院で育った「きよら」な彼らこそ、光源氏の後継者なのである。そのことを語り手は〈見せ消ち〉的に表現しているのである。

「匂宮」巻の語り手は、光源氏のかつての理想的偶像性を薫と匂宮に投影したいという欲望を抱いている。語り手の欲望は欠如によって活性化される。すなわち、光源氏という色好みの恋愛の英雄の死^{II}不在が語り手を欲望させており、それを幻想的に補完すべく、薫と匂宮を後継者として眼差したいのである。にもかかわらず、この時点の薫と匂宮は所詮「いとまばゆき際にはおはせざるべし」というありさまなのである。この文言には、語り手の相反する意識さえ読み取れるのである。

語り手の欲望――それを露骨にいうならば、垣間見をする男君の復活ということになりはしまいか。抽象的なことではなく、いったい光源氏が死去することによって物語は何を失ったのだろうか。物語場面を〈視覚的な世界の構造を持った文章〉と説明する清水好子は、光源氏の機能を考えるうえで重要な指摘をしている。

《こゝに場面といふのは、視覚的な世界の構造を持つ文章の事である。これが源氏物語における言語による具象化の方法の原型であつた。こゝろみに、源氏をめぐる主要な女性がどういふ風にして作中にあらはれるかといふならば、悉く、源氏と出会ふことによつてある。(中略)もし、さういふ事のない場合は、「のぞき見」といふ手段がある。作中に、在る人物の視線が設けられる事で、そこに展開されるのは必然的に視覚的な構造を持つ世界、即ち場面である。》(4)

場面は誰かの視点に依拠している。視線が場面を生み出すという氏の意見は、恋愛物語を駆動させる不可欠な機能を指摘している。すなわち、正篇における光源氏の具体的機能とは〈視線〉である。物語に登場する女君たちは《悉く》光源氏に眼差されることで、恋愛物語のヒロイン的地位にせり上がってきた。そして、《のぞき見》つまり垣間見とは、〈視線〉によるヒロイン化の最も劇的たる方法の謂いである。

光源氏の死は、特権的な〈視線〉の欠如につながる。第一に、垣間見をする男君の欠如である。恋愛物語が垣間見から始発するという王朝物語の默契的規範を考慮するならば、その視線の欠如は致命的である。第二に、垣間見場面もそうだが、正篇で登場人物と語り手との一体化―それにより読者もその視線に同化―する機能をもつばら光源氏が担っていたとするならば、その欠如も甚だ致命的である。物語文学の主人公とは視点の同化を引き起こす人物だと考えられる。(5)

第三部、光源氏が死去したことにより何を失ったかは明白だろう。それは同化的視点の喪失である。物語空間を支配してきた人物への同一化ができなくなった読者は、その依代を探す作業に没頭せざるをえない。恋愛物語を牽引する、垣間見を行ない得る男君の渴望―それが光源氏から薫・匂宮への移行の意味である。薫と匂宮は、読者の窃視願望を叶える人物として物語に要請された機能を等しく担っているのである。

3、問題の所在

宇治十帖では光源氏がほとんど回想されない。この現象に着目した神田龍身は、薫や匂宮といった新世代の回想の中から光源氏の存在が締め出されていると論じた(6)。昨今の第三部研究においては、〈宇治十帖Ⅱ光源氏時代と断絶した世界〉という見解がほぼ定説と化している。

なるほど、光源氏没後の第三部が新世代の物語であることは疑いえない事実だろう。第三部劈頭の「匂宮」巻でさえ、「幻」巻の八年後の物語である。そこではもはや光源氏の死は絶対の哀惜の対象としては存在していない。新世代の物語で光源氏の死は些細な一挿話にすぎず、〈場面〉をまったく形成しえない。語り手がいくら「天の下の人、院を恋ひきこえぬなく」とは言ってみたとところで、物語がそれとは矛盾した様相を見せているのである。

光源氏はたしかに死んだ。しかしその存在は完全に抹消されているのだろうか。たとえば、光源氏の死に至る道程は生者の声に現象していたりもする。喩えるならそれは、現在という床に滴り落ちる過去という時のしずくである。そして零れ落ちた過去はいつしか床を侵食し、〈染み〉として残りつづけるのではないだろうか。

第三部で死者・光源氏は過剰に美化されて語られる。「匂宮」巻の語り手がその先陣を切っているのだが、光源氏ゆかりの人によって執拗に懐古され、彼を過剰に褒め讃えた言辞が繰り返される。いったい、光源氏を想起することに何か意味はあるのだろうか。それは単なる追慕でしかないのか。

4、埋葬される光源氏

「匂宮」巻に続く「紅梅」巻では、主に紅梅大納言が光源氏を想起する。故致仕大臣の次男で柏木の弟にあたる紅梅大納言は藤氏の筆頭となっており、立場上、光源氏一族と競う関係にある。そんな光源氏の血縁者でない藤氏筆頭の紅梅でさえ、源氏は追慕するに値する人物であった。

(紅梅大納言)「あはれ、光る源氏といはゆる御さかりの大將などにおはせしころ、童にてかやうにてまじらひ馴れきこえしこそ、世とともに恋しうはべれ。この宮たちを世人もいとこと思ひきこえ、げに人にめでられんとなりたまへる御ありさまなれど、端が端にもおぼえたまはぬはなほたぐひあらじと、思ひきこえし心のなしにやありけん。おほかたにて思ひ出でたてまつるに、…」

(「紅梅」五―四二頁)

往時、光源氏と音楽を楽しんだ仲にあった紅梅大納言だが、あくまでも「おほかた」の立場つまり「世人」の立場から光源氏を悼んでいる。おのれの立場を、光源氏の近親者や縁深い仲ではないと考えているのである。遠い昔、「童にてかやうにてまじらひ馴れきこえし」頃を恋しく思う紅梅であったが、「この宮たちを」と薫・匂宮の両者にその興味が移っている。ここに彼の複雑な(今)の状況をみてとることも可能だろう。(紅梅の悩みは三人の姫君の処遇にあり、もっぱら婿探しが彼の関心事である。)

また紅梅は薫と匂宮の世評を認めながら、「端が端にも…」と彼らの美質がとおく光源氏に及ばないことを確

認している。先に挙げた「匂宮」巻の語り手の意識に起こったジレンマを、紅梅も同様に感じているのである。すなわち紅梅も、光源氏のかつての理想的偶像性を薫と匂宮に投影したいという欲望を抱いている。

これに続くかたちで、紅梅が匂宮を光源氏の後継者として定位したことが述べられている。

(紅梅大納言)「いかがはせん。昔の恋しき御形見にはこの宮ばかりこそは。仏の隠れたまひけむ御なごりに
は、阿難が光放ちけんを、二たび出でたまへるかと思ふさかしき聖のありけるを。闇にまどふるけ所に、闇
こえをかさむかし」とて：

(「紅梅」五―四三頁)

紅梅は、匂宮を光源氏の「御形見」として定めたが、それも「いかがはせん」という妥協の産物に過ぎないのである。また、「匂宮」巻の語り手が用いたレトリックは「光隠れたまひにし後」とか「火を消ちたるやうに」というものだったが、紅梅も「仏」や「闇」といったことばを用い、光源氏を想起している。紅梅は匂宮を「阿難」(釈迦の十大弟子の一人)に喩えているが、それは間接的に光源氏を称揚しているのであって、匂宮を直截に理想化しているわけではない。

すなわち、紅梅による光源氏賞賛の方法は、「匂宮」巻の語り手の口吻に類似している。彼は光源氏を絶対的に理想視しているばかりに、表現がきわめて抽象的になっているのである。そのような理想化⇨抽象化の言説は、すでに「匂宮」巻で繰り返し行なわれてきたものなので、ここにきてこの理想化の言説は凡化しているといえる。それは、彼らのことばによって光源氏の死がありきたりの出来事に同定されることでもある。

見方を変えていえば、「匂宮」巻の語り手と紅梅大納言の想起の言説は、じつは協働していて、理想化のことは重複させることで光源氏のイメージを強化しているともいえるのである。このようにして記憶の中の光源氏は無条件に賞賛されるイメージに回収されていくのであろう。

ここにおいて、光源氏はある意味で埋葬されたといえるのではないだろうか。〈死〉とは一つのしかるべき場所を他者によつて与えられることの謂いである。むしろ、生者という〈他者〉のことばによつて死者は総括され、その位置を定められる。もの言わぬ死者は永遠に他者のことばによつて位置を授けられる、究極的に受動的な存在である。光源氏の場合、それは、理想性をあげつらう人々の反応を通して「仏」のごとく聖化されていく過程であった。他者に語られることで光源氏の理想性は保証されていくわけだが、逆にいえば、〈光源氏〉という過去は事後的にねつ造されたのである。ここに稿者は、死者としての光源氏の存在を看取する。光源氏の死は公共的な出来事となり、その死の語られ方がもつと因習的な様子になるだろう。なぜなら光源氏はひとつのしかるべき場所を与えられたのだから。

5、「竹河」巻の玉鬘—エゴイステイックな生者—

光源氏の縁者たちは、個人的な感慨を挟みながら光源氏を回想する。内面的な親密さを伴った記憶を持つ者たちの想起には、どのような偏向があるのだろうか。「匂宮」・「紅梅」巻とみてきたので、順を追って次は「竹河」巻を考察しよう。

「竹河」巻では玉鬘が光源氏を想起するのだが、その背景には玉鬘が夫の鬘黒大臣を失ったことからもたらされた寂々たる状況がある。鬘黒の死後、遺族たちの暮らしぶりは閑散とし「殿の内しめやかにゆく」(「竹河」五―五四頁)状況をひしひしと感じていることが述べられる。「内々の御宝物、領じたまふ所どころなど、その方の衰へはなけれど」すなわち、経済的にはさほどの衰えはないなどと体面を取り繕おうとすることばが、かえってその寂寥感を感じさせて痛々しい。東隣の紅梅邸で大鬘が催された折なども、「隣のかくののしりて、行きちがふ車の音、前駆追ふ声々も、昔の事思ひ出でられて、この殿にはものあはれにながめたまふ。」(「竹河」五―一〇四頁)とあり、隣家のにぎやかな様子を「ものあはれにながめ」る玉鬘の姿が描かれている。

折に触れて鬘黒在世中のことを思い出し、不如意な現実を痛感する玉鬘だが、幾度にかわたり光源氏を追想する。

(薰ヲ) 六条院の御けはひ近うと思ひなすが心ことなるにやあらむ、世の中におのづからもてかしづかれたまへる人なり。(中路)「院の御心ばへを思ひ出できこえて、慰む世なういみじうのみ思ほゆるを、その御形見にも誰をかは見たてまつらむ。右大臣はことごとしき御ほどにて、ついでなき対面も難きを」などのたまひて、…

〔竹河〕五―五八頁)

鬘黒の死後、権勢から遠ざかる玉鬘は、遠く輝かしい光源氏世界に憧憬し、固執する。「慰む世なういみじうのみ思ほゆるを」と、現在の困難な状況を〈否認〉したい、つまり現実を見たくない玉鬘は、幻想に救いを求め

る。すなわち、過去の優美さに依存し自己の存在をも美化しようとしているのである。喪失の被害感は、回顧的に失われたものの理念化を起こす。あたかも老人的な感慨にふけり、過去への郷愁に浸りきる玉鬘であった。

光源氏幻想に浸ろうとする玉鬘だが、現実には光源氏不在という状況である。そこで玉鬘は、「その御形見にも誰をかは見たてまつらむ」と、その〈穴〉をなんらかの実体で充填しようとする。そこで白羽の矢が立ったのが、夕霧と薫であった。

玉鬘の心裏には、夕霧と薫との交際を通じることによって世間的に体面を保ちたいという意識が強くあるようで、たとえば次のように、光源氏を想起する様子にも何やら打算的な姿を感じざるを得ないのである。

(玉鬘)「今は、かく、世に経る数にもあらぬやうになりゆくありさまを思し数まふるになむ、過ぎにし御ことも、いとど忘れがたく思ひたまへられける」と申したまひけるついでに、院よりのたまはすることほめかしきこえたまふ。

〔竹河〕五—六〇頁

右は正月の挨拶の折に夕霧と交わした際の玉鬘のことばだが、ここで「ついでに、院よりのたまはすることほめかしきこえたまふ」と、それとなく光源氏の心遣いを持ち出すあたりが打算めいているのである。玉鬘は、悲嘆的に光源氏を追懐しているわけではない。自分が往時、光源氏の厚情を賜っていたことを夕霧に示して、そのようにとりはからうよう暗黙の要求を行なっているのである。すなわち、光源氏の存在は玉鬘の欲望に貢献する道具と化しており、同時にその欲望を韜晦させる隠れ蓑として利用されているにすぎないのである。生者は自

己回帰的に死者を想起する。玉鬘のように困難な現実状況にある者は、光源氏という輝かしい過去の存在に自らを依拠せしめ、過去を再利用して、現在を生きているのである。

スラヴォイ・ジジエクは、《ある対象の崇高な質は内在的なものではなく、それが幻想空間の中で占める位置に及ぼされる効果》(7)だと述べているが、玉鬘は、夕霧と薫(と光源氏)に対してそのような処理を施してまなざしているのである。

(玉鬘)「大臣は、ねびまさりたまふままに、故院にいとようこそおぼえたてまつりたまへれ。この君は、似たまへるところも見えたまはぬを、けはひのいとしめやかになまめいたるもてなしぞ、かの御若ざかり思ひやらるる。かうざまにぞおはしけんかし」など、思ひ出できこえたまひて、うちしほたれたまふ。

〔竹河〕五—六三頁

夕霧と薫を見つめる玉鬘のまなざしは、彼らを見ているようでありながら、そこに別のものを見ている。年老いた夕霧の姿に光源氏のおもかげを見いだし、薫の姿を見ては光源氏の(見たこともない)若かりし姿を想像する。玉鬘という他者の《幻想空間》なかでは、夕霧と薫が〈光源氏〉という投影された理想性と同一化してしまっているのである。

〈見る〉という視覚による認識行為には、多分に幻視性が潜在している。かつて益田勝実は二重構造の視覚をもつ幻視の眼という観念論的な見解を提示した。

《夜の海上を漕ぐ船人たちも、漆黒の空に神の弓矢を、神の櫛を、帯をみて、讚嘆する。その眼に映じている三日月や宵の明星（あかぼし）の姿が、ありのままに見えないのではない。横雲は横雲―しかし、同時に、かれらの眼は、そこに神の愛用の美しい帯を現に見てもいる。（中略）物を物そのものとしてみ、また、信仰の上でのイメージにおいてみる。二重構造の視覚、それは原始以来の眼であった。》（8）

この《二重構造の視覚》とは、まなざす者の心のはたらきによってなされる視認行為の謂いである。《形代／ゆかり》の論理も、見る行為と《幻視》の関連性を追及したものであったのだろう。

「その御形見にも誰をかは見たてまつらむ」という心的傾向にある玉鬘は、夕霧や薫を見ると同時に、光源氏という幻想の存在をもまなざしている。いまや玉鬘は、信仰にも近しい態度で光源氏をまなざし、自身の拠りどころとして光源氏を崇高化しているのである。

薫の中にあつて薫以上のものを見ている玉鬘は、薫から送られた和歌をみても、「手なども、いとをかしようもあるかな。いかなる人、今よりかくとのひたらむ。幼くて、院にも後れたてまつり…」〔竹河〕五―六八頁と、うつすら光源氏の血の影響を感じている。もちろん、この認識は―薫が真実、光源氏の息子ではない以上―誤解である。

現実を否認したいという心的傾向にある玉鬘は、薫の実際の姿を見ようとはしない。己の幻想の中で作られた《薫＝光源氏的な理想イメージ》でしかまなざさそうとしないのである。光源氏について語る玉鬘は自己中心的に想起しているにすぎない。むろん、それゆえに光源氏は崇高化され至高の存在にまで高められたのだ。死者は生

者の関心にのみ引きつけられて想起される。光源氏をだしにして己の欲望の充足をはかる玉鬘のすがたからは、死者を利用して生きるエゴイステイックな生者の存在が見出せるのである。(9)

6、繋がる過去と現在

宇治十帖が、光源氏世界と断絶した印象を受けることは確かである。だが、物語が宇治を舞台にした恋愛物語であることは決して、過去と断絶していることを意味してはいない。それは、都を相対化する視点を備えた宇治十帖の動きが必然的に抱えてしまった併発的結果である。都から離れようとする〈運動〉が、過去を否認しているかのように映るだけのことである。

たとえば、「若菜下」巻で即位した今上帝が長々と「夢浮橋」巻まで、おおよそ三〇年帝位に就いていることを考えてみれば、断絶という発想が当てはまらないことが分かる。すなわち第三部は、匂宮三帖とか宇治十帖とかに関係なく、等しく過去に束縛されていると見るべきである。実際、匂宮三帖と宇治十帖は、同時時間軸上に存在する並列的な位相にある物語である。過去に束縛されている都世界の閉塞性を打破せんがために宇治への移行があるとすれば、なおさらである。

王朝物語の形式に拘泥し、みせかけの治癒として不毛な恋愛物語を繰り広げる第三部世界の背後には、正篇という圧倒的な過去が潜在している。あたかも、自覚されないまま潜んでいる物語の前意識である。第三部で光源氏が想起される瞬間とは、潜在していた過去が顕現する瞬間としてあるのではないだろうか。

7、第三部の夕霧―父の遺志を継ぐ息子―

第三部世界には、光源氏の〈魂〉を継承する人物がいる。たとえば、「手習」巻では次のように語られている。

尼君、「光る君と聞こえけん故院の御ありさまには、え並びたまはじ、とおぼゆるを、ただ今の世に、この御族ぞめでられたまふなる。右の大殿と」とのたまへば、(紀伊守)「それは、容貌もいとうるはしうきよらに、宿徳にて、際ことなるさまぞしたまへる。兵部卿宮ぞいといみじうおはするや。女にて馴れ仕うまつらばや、となんおぼえはべる」など、教へたらんやうに言ひつづく。

(「手習」六一―三四七頁)

場面は浮舟出家後の小野の里。妹尼と紀伊守のあいだでなされた会話の一節である。ここでも、紀伊守や尼君らが抱く〈光源氏像〉が、やはり「故院の御ありさまには、え並びたまはじ」というイデアルな姿であることを確認しておこう。これは、さきに挙げた「匂宮」巻の語り手の発言(「かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にあり難かりけり」と同じ認識傾向の範囲にある。宇治十帖の後半パートに至っても、受領階級のうわさ話という〈世間〉の声を通して、今の世には光源氏と比肩できる者がいないということ物語は反復し強化している。

また「この御族ぞめでられたまふなる」とあり、光源氏一族が世間でもはやされていることが確認できる。

そして、尼君が「右の大殿と」と言っているように、光源氏の継承者の第一には長子・夕霧がいる。都世界と接触していると自負する紀伊守が、「容貌もいとうるはしうきよらに」と視認しているように、第三部世界の夕霧は、父・光源氏の名で「きよらに」輝いている。

第三部世界の夕霧の威勢は他家を完全に圧倒している。「竹河」巻では「御容貌よりはじめて、飽かぬことななく見ゆる人の御ありさまおぼえなり。」（「竹河」五―五九頁）とあり、世人から羨望のまなざしを集める夕霧の人となりを確認できる。

夕霧は第三部全般を通して、光源氏世界の後継者＝守護者として存在している。たとえば「椎木」巻には、「六条院より伝はりて、右大殿しりたまふ所は、川よりをちにいと広くおもしろくてあるに、御設けさせたまへり。」（「椎木」五―一六一頁）とあり、夕霧が宇治の別邸を光源氏から相続していることが確認できる。また「竹河」巻では、夕霧が光源氏の遺志をつぎ、玉鬘を厚遇している様子が語られている。

六条院には、すべて、なほ、昔に交らず数まへきこえたまひて、亡せたまひなむ後の事ども書きおきたまへる御処分の文どもにも、中宮の御次に加へたてまつりたまへれば、右の大殿などは、なかなかその心ありて、さるべきをりをり訪れきこえたまふ。

（「竹河」五―五四頁）

物語中、光源氏が残した具体的な遺言などは描かれていないものの、「亡せたまひなむ後の事ども書きおきたまへる御処分の文ども」とあり、この実務的な相続に関する手文書どおりに夕霧が仕切っている様子がわかる。

さきの宇治別荘もこの「御処分の文ども」に記載されていたのだろう。また肝心の六条院も夕霧が相続している。「宿木」巻、匂宮を六の君の婿君に迎える場面では「右大殿には、六条院の東の殿磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに」(「宿木」五―三九〇頁)とある。「匂宮」巻では、夕霧が六条院の荒廃を防ぐべく対応する様子が記述されている。

大殿は、いづ方の御ことをも、昔の御心おきてのままに改めかはることなく、あまねき親心に仕うまつりたまふにも、対の上のかやうにてとまりたまへらましかば、いかばかり心を尽くして仕うまつり見えたてまつらまし、つひに、いささかも、とり分きてわが心寄せと見知りたまふべきふしもなくて過ぎたまひにしことを、口惜しう飽かず悲しう思ひ出できこえたまふ。(「匂宮」五―一四―一五頁)

「昔の御心おきてのままに改めかはることなく」とあり、光源氏の遺志が脈々とその息子・夕霧に受け継がれているということが分かる。夕霧は、〈父の名〉を遵守すべき規範として掲げ、それに従順であろうとする〈父の息子〉である。

また夕霧がここで、光源氏ではなく紫上を追懐していることにも注意すべきだろう。夕霧は、「対の上のかやうにてとまりたまへらましかば」と亡き紫上の死を悼み、「とり分きてわが心寄せ」ていたことを回顧する。往時夕霧は、偶然紫上を垣間見て淡い憧憬の情を抱いた。その禁忌され抑圧された思いは、その死顔の美しさに魅了されてからもなお、累累と続いていた。夕霧のエディプス・コンプレックス的な欲望は源氏の死後も続いている。

るのであり、夕霧は第三部でも光源氏を模倣し続ける〈息子〉であり続けるのである。

その結果、夕霧は世間から「きよらに」まなざされることとなる。先述したが、「竹河」巻の玉鬘は、年老いた夕霧を見て光源氏と似ていると視認していた。「蜻蛉」巻では次のように語られている。

左大臣殿、昔の御けはひにも劣らず、すべて限りもなく営み仕うまつりたまふ。いかめしうなりにたる御族なれば、なかなかいにしへよりもいまめかしきことはまさりてさへなむありける。(「蜻蛉」六―二五三頁)

夕霧は、その繁栄ぶりから光源氏に勝るとも劣らないという評価を世間から与えられる。「なかなかいにしへよりもいまめかしきことはまさりて」とあるのは、光源氏を模倣し続けた夕霧に対する、最大の賛辞ではあるまいか。光源氏の掟を遵守しその裁量を模倣し続けた夕霧は、宇治十帖に至ると空虚な内実―光源氏的な偶像性―を獲得したのである。もちろんこの評価も他者のまなざしに依拠した幻視的评价の域を出ないものではあるが、世間という〈他者〉の眼差しによって、夕霧は光源氏の不在を覆い隠す外見そのものと化したのである。

興味深いことに、夕霧が直接的に光源氏を想起する場面は描かれない。夕霧はただひたすら実務的にその遺志を遵守し続けるだけである。ここに夕霧の〈息子〉たる歪みが見てとれるのかもしれない。父に憧憬し模倣しながら、どこかでその影を拭い去りたいという〈息子〉特有のコンプレックスが彼を想起せしめないのだろうか。想起したとしても、夕霧の意識は紫上への追想へとずれていってしまうのである。第三部の夕霧には、光源氏に対する屈折した思いを抱え、それでも父の遺志を継ぐかのように振る舞い、父を模倣し続ける〈息子〉の姿が見

えるのであった。(10)

結論

本論文では、源氏物語第三部で死者・光源氏がどのようなあり方で物語世界に関わっているのかを考察した。死者は生者の想起の言説に現象する。光源氏は極端に抽象化され、イデアルな光源氏〈像〉として物語世界に君臨することとなる。

〈埋葬〉とは一つのしかるべき場所を与えることの謂いである。「匂宮」巻の語り手や紅梅大納言による想起の言説が、イデアルな光源氏像を想像し強固にしていた。第三部の光源氏は生前の光源氏とは似て非なる存在で、生者たちによって間違えられた自己同一性を与えられているのである。その意味で死者とは、生者の欲望によって作りだされた虚像―実像と似て非なるもの―といえるだろう。

人は不在化すると崇高の対象にまで高められる。不在とは崇高化に欠かせない要因で、絶対的な不在状態の謂いである死とは、崇高化の極みであるともいえる。行動することも声を発することも出来ない死者だからこそ、幻想として永続的に保持され続けるのである。

また、光源氏を聖化する人々の反応は、別の動きをも見せる。それは、中核にある空虚をなんらかの実体的な内容物で補完しようとする動きである。つまり、不在の〈光源氏像〉を誰か別の人物の中に見出そうとする動きである。たとえば「匂宮」巻の語り手は、恋愛物語で、失われた〈男〉のイメージを再創造しようとした。光源

氏という欠如に対し、それを埋めようとする要素Ⅱ薫と匂宮の発見がそれである。

薫と匂宮の姿は、光源氏を視る人々のまなざしから変ったのである。光源氏の不在を《幻視》することで埋めようとする作業は、第三部世界で執拗に行なわれており、《世間》という無数の他者のまなざしが、薫と匂宮を昇華させたのである。そして、薫と匂宮という見せかけの外見は、最終的に空虚な内実―光源氏的な偶像性―を(再)獲得していく。宇治十帖の後半パートに至ると、浮舟を中心とした下級貴族の眼差しによって、薫と匂宮は投影された理想性と同一化し、光源氏の不在を覆い隠す外見そのものと化する。

光源氏のイメージの定立化は、薫・匂宮のラベリングに貢献するのである。そして光源氏の欠如が薫・匂宮という代理によって補充されたあとの宇治十帖では、光源氏の記憶が溶暗していく機制になっているのである。

また、死者・光源氏の存在は、生者の欲望を韜晦させる装置、つまり隠れ蓑として機能していた。語り手をふくめ、光源氏を想起する生者おのおのの心裡には、イデアルな光源氏像を求める何かが潜在していた。薫が中君に欲望しながら光源氏の過去を持ち出して近づいたことしかり、明石中宮が法華八講を主催し威勢を見せつけたこと(11)しかり、紅梅大納言が婿探しのために源氏を想起したことしかりである。総じて、生者たちは自己回帰的に死者を想起するのである。

然らば続篇の光源氏とは、鏡のような存在だったのではないだろうか。つまり、生者の欲望に対し自在に奉仕し生者の欲望を映し出す鏡である。生者は光源氏を想起し、それを方便にして自らの欲望を達成しようとしているのである。

正篇の末尾、テキスト空間に沈黙そのものを書き記した「雲隠」巻があった。空間のブラックホールと化した

「雲隠」巻の空白は、最も死に近接したエクリチュールであった。源氏物語第三部に現れる死者・光源氏は、空白それ自体として永遠にとどまり続ける「雲隠」の穴に等しい存在と化しているのではなからうか。他者によって自由自在に意味づけされる存在！。

死者・光源氏は生者に想起されることで理想性を付与され、その崇高化されたイデアルな姿は永遠に持続することとなる。しかしながら、生者の口にししか現象しえない死者は、結局生者の幻想のなかの存在であり、生者の方便に利用されてしまうものでしかなかったのである。

注・参考文献

- (1) 論文中「源氏物語」の本文の引用は全て小学館刊・日本古典文学全集『源氏物語』を用いた。()内は巻名と同書での該当頁数を表す。
- (2) 小林正明「差延化する光―『源氏物語』論」・『人物で読む『源氏物語』第二巻―光源氏I』所収・二〇〇五年六月・勉誠出版
- (3) 河添房江『源氏物語の喩と王権』・『II 暁の喩 2字治の暁―闇と光の喩の時空―』・一九九二年十一月・有精堂
- (4) 清水好子「源氏物語の作風」・『国語国文』昭和二八年一月号
- (5) ヒッチコック監督作品の『サイコ』(一九六〇年)は、「主人公」の概念を理解するのに有効な視座を与える。この物語は、観客が「マリオン」という女性の眼差しに同化しながら進行する。その意味で物語の主人公はマリオン

ンである。しかし映画の中盤でマリオンはベイツという青年に殺されてしまう。ここで観客は絶対的な混乱に陥る。我々が同化してきたマリオンが殺されてしまった。この先、この映画は誰の視線に依拠して見ればよいのか。ヒッチコックが描いた恐怖は、主人公の殺害＝同化的視点の欠如という喪失感覚にほかならない。マリオンが殺害されてしばらくの間、観客は依拠する視線を回復する作業に没頭せざるをえない。そしてヒッチコックはカメラという〈視線〉を操作し同化対象の変更をやつてのける。観客は知らぬ間に殺人犯・ベイツの視線に同化しているのである。映画の後半は一転して、ベイツの物語となる。源氏物語において、光源氏が死去することも同様の混乱を生み出しているのだろう。正篇から続篇への移行は、視点人物の変化を余儀なくする。続篇の「主人公」が語り手の口吻によつて薫・匂宮へと移行していることは先に述べたとおりである。

(6) 神田龍身「匂宮三帖の再評価―王朝時代への挽歌」・『新講 源氏物語を学ぶ人のために』所収・一九九五年二月・世界思想社

(7) スラヴォイ・ジジエク『斜めから見る―大衆文化を通してラカン理論へ―』・「第4章騙されない者が誤るのはなぜか」・鈴木晶訳・一九九五年六月・青土社

(8) 益田勝実『火山列島の思想』所収・一九六八年・筑摩書房

(9) 薫にも死者を利用する様相がみてとれる。「宿木」巻、薫は光源氏死去の折に感じた「いにしへの悲しさ」を語るが、じつはそれをだしに中君への気分的接近を図ろうとしているのである。薫の思惟は中君に向いており、光源氏追懐のエピソードは中君に接近する方便でしかないのである。「蜻蛉」巻でも、薫は光源氏の思い出を便宜的に利用する。そこでは間接的にはあるが、女一の宮に近づく方便として光源氏の話題が用いられていた。薫は光

源氏を想起しながら、同時に色めいた欲望を抱えており、その実現に貢献すべく〈光源氏〉という過去を呼び出すのである。

(10) 第三部の冷泉院も光源氏に捕縛された〈息子〉として存在する。「竹河」巻では、老齡の冷泉院が玉鬘に執着するが、これは光源氏の欲望を模倣する衝動に駆られているかのようである。薫を異常に寵愛する背景にも、光源氏の願いがあつた。正月男踏歌の際の「この殿」の演奏（竹河巻）や、女三宮降嫁の一件を想起し八宮の姫君に興味をもつこと（橋姫巻）など、光源氏の過去の出来事を再演するのも顕著な例である。ただし冷泉院の模倣はすべて歪んだ再演でしかなく、その姿は光源氏をもどいて失敗した道化のようである。物語は冷泉院の滑稽な姿を描くことで、光源氏の理想性を強化していく。夕霧・冷泉院という〈息子〉たちが模倣する様子が語られることで、光源氏の姿はより崇高なものへと昇華していくのである。

(11) 六条院を起源にもつ明石中宮は、光源氏の仰せごとを遵守し、その威光を背負って生きる〈父の娘〉である。「蜻蛉」巻、明石中宮は六条院で法華八講を主催した。法華八講の壮大さは光源氏の威勢を示すのではなく、むしろ法会を主催する明石中宮の威勢を示すものとして行なわれている。盛大な法会を通して、明石中宮は〈光源氏を祀る者〉という己の立場を世間に主張しているのであって、死者の供養が生者の華麗な自己顕示になつていのである。光源氏を祀るための法華八講は、明石中宮の自己顕示欲を前提としたふるまいであつた。死者はそれを祀る者の手に捕らえられているのである。